



JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Tuesday 17 November 2009 (afternoon)

Mardi 17 novembre 2009 (après-midi)

Martes 17 de noviembre de 2009 (tarde)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

次の1の文章と2の詩のうち、どちらか一つを選んでコメントリー（解説文）を書きなさい。

1.

彼と妻との間には最早^{もはや}悲しみの時機は過ぎていた。彼は今まで医者から妻の死の宣告を幾度聞かされたか分らなかった。その度に彼は医者を変えてみた。彼は最後の努力で彼の力の及ぶ限り死と戦った。が、彼が戦えは戦うほど、彼が医者を変えれば変えるほど、医者の死の宣告は事実と一緒に^{いっしょに}明克^{めいこく}の度を加えた。彼は^{しる}衰^しれてしまった。彼は疲れてしまった。彼は手を放したまま呆然たる蔵のように、虚無の中へ坐り込んだ。そうして、今は、二人は二人を引き裂く死の断面を見ようとしてただ互に暗い顔^{おそろ}を覗^{あわ}き合せているだけである。丁度、二人の眼と眼の間に死が現れでもするかのように。彼は食事の時刻が来ると、黙^{もく}って匙^しにスプーンを^{すく}掬^くい、黙^{もく}って妻の口の中へ流し込んだ。丁度、妻の腹の中に潜^{ひそ}んでいる死に食物を与えるように。

あるとき、彼は低い声でそつと妻に^{きこ}訊^きねてみた。

「お前は、死ぬのが、ちよつとも怖^こくはないのかね。」

「ええ。」と妻は答えた。

「お前は、もう生きたいとは、ちよつとも思わないのかね。」

「あたし、死にたい。」

「うむ。」と彼は^{うなづ}頷^{うなづ}いた。

二人は二人の心が硝子^{がらす}の両面から覗^{のぞ}き合っている顔のようにはつきりと感じられた。

今は、彼の妻は、ただ生死の間を^{うご}転^{ころ}っている一^{いっ}疋^{ぽう}の怪物だった。あの激しい熱情をもって彼を愛した妻は、いつの間にか^{いっと}尽^{ことごと}く彼の前から消え失せてしまっていた。そうして、彼は？ ああの激しい情熱をもって妻を愛した彼は、今は感情^{かんじ}の擦^すり切れた一個の機械となっているにすぎなかった。実際、この二人は、その互に受けた長い時間の苦痛のために、もう夫婦でもなければ人間でもなかった。二人の眼と眼を^へ経^へたてている空間の距離には、ただ透明な空気だけが柔順に伸縮しているだけである。その二人の間の空気は死が現れて妻の眼を奪うまで、恐らく陽が輝けば明るくなり、陽が没すれば暗くなるに相違ない。二人にとって、時間は最早愛情では伸縮せず、ただ二人の眼と眼の空間に明暗を与える太陽の光線の変化となつて、露骨^{ろこつ}に現れているだけにすぎなかった。それは静かな真空のような虚無であつた。彼には横たわっている妻の顔が、その傍^{かたわ}の薬台や盆のように、一個の美事^{みこと}な静物に見え始めた。

彼は二人の間の空間をかつての生き生きとした愛情のように美しくするために、花壇^{かだん}の中からマーガレットや^{ひなげし}雛^{ひな}嚶^お栗^りをとって来た。その白いマーガレットは虚無の中で、ほのかに妻の動かぬ

30 表情に笑を与えた。またあの柔かな雛唄が壺にささつて微風に赤々と揺らめくと、妻はかすかな歎声を洩らして眺めていた。この四角な部屋に並べられた壺や寝台や壁や横顔や花々の静まった静物の線の中から、かすかな一条の歎声が洩れるとは。彼は彼女のその歎声の秘められたような美しさを聴くために、戸外から手に入る花という花を部屋の中へ集め出した。

薔薇は朝毎に水に濡れたまま揺れて来た。紫陽花と矢車草と野茨と芍薬と菊と、カンナは絶えず三方の壁の上で咲いていた。それは華やかな花屋のような部屋であつた。〔中略〕

35 そういう夜には、彼はベランダからぬけ出し夜の園丁のように花の中を歩き廻った。湿った芝生に抱かれた池の中で、一本の噴水が月光を散らしながら周囲の石と花とに戯れていた。それは穏やかに庭で育った高価な家畜のような淑やかさをもっていた。また遠く入江を包んだ一本の岬は花園を抱いた黒い腕のように曲つていた。そうして、水平線は遥か一髪の光った毛のように月に向つて膨らみながら花壇の上で浮いていた。

(横光利一、「花園の思想」、一九二七年)

- － 妻と夫の会話から、二人のどのような関係が読みとれますか。
- － 花を飾るようになる夫の気持ちのゆれ（変化）を辿りなさい。
- － この文章にはどのような特徴がありますか。それはこの抜粋文の内容をどのように生かしていると思いますか。
- － この抜粋文から一番強く受け止められるものは何ですか。そのように受け止めた理由についても説明しなさい。

2.

夏のきのこ

- 真夏の、森林の
ほらあなのようになったかわいた径を
何万びきという蟻ありの行列が
あとからあとからとつづいている。
- 5 一方へいく蟻ありの顎あごはからつぼだが
ひきかえしていく蟻ありの顎あごには
青い葉っぱが喰くわえられている。
搬はこびながら、葉っぱを噛かみくだき
祖先伝来の、広さ約三〇〇立方メートルもあるという
- 10 地下の苗床ななだにばら撒まかれる。
くらい蟻塚ありづかの城で、
ながい時間が経った。
くだかれ、撒まかれた葉っぱは
いちめんいっめんに腐りはじめた。
- 15 その上に、白い、小さい
キヤベツ玉のようなきのこの網あみだけが
ふうわりと霧きりのようにかかっている
だれも見たことがない
夏のきのこだ。

(長谷川龍生、「夏のきのこ」『ペウロウの鶴』一九五七年)

(注) 蟻塚(ありづか) アリが地中に巣を作るために地表に持ち出した土砂の山。また、塚(土を盛った墓はか)のように土や落葉を積み上げて作ったアリの巣。

- この詩の中の「森の中の蟻の行列」「地下の苗床」は、何を表していると思いますか。
- 「夏のきのこ」という詩全体からはどのような雰囲気がかもし出されていますか。
- 詩人の描写の仕方について、あなたの考えを述べなさい。
- この詩の文体や調子などの特徴について述べ、それらが作品の中でどのように生かされているか、考えるところを述べなさい。